昭和三十年十二月二十七日 第三種郵便物認可
昭和十九年十二月二十七日 第三種郵便物認可
昭和十九年十一月一日 印刷納本
昭和十九年十一月一日 發行

第五百九十七號

本部團報

○日毎に戰局は重大化する。そこに宗教報國團に於て十一月二十一日から月末迄の十日間を、完奉新願に充てたが、本團ではこれより先、十一日、日蓮聖人小松原御法難會をキツカケに僅か三日間であるが、毎朝六時半より入時迄、同志の熱禱を捧げた。從來は修法後、必ず可然講話あつて信解の堵進に資したが、此度の淸集は完奉新願會で、一般布教が目的ではない、各位の至誠を竭くして任務完奉を熱禱した。日時は極めて僅少であつたが、烈火の如き本當の祈りの相に聖訓『祈禱鈔』を偲んだ。即ち眞劍に法華經を信じて、南無妙法蓮華經と唱へるならば、誰であつても其の祈りの叶はぬことはないとの事である。若し叶はぬことのあれば、吾々がまだ誠意が足らないのである。經力の偉弱でも、聖團の間違ひでもない。此際各地方の同志も夫れ〳〵適當に御祈禱を希ふ次第である。

○在京團員のある方々が、先頃來疎開され行かれた地方にあつても、郷に入つては郷に從へといふやうに、その人等に協力して增産に勵んで戴くが何よりである。これで安心だといふやうな放談に流れると大變なことになる。凡そ吉凶禍福は外から與へられるのではなく、自分が心の中に造るものである。御用心々々々。

○先般各種雜誌の整備が奬令され、門下に於てさしも隆榮を誇つてるたものが盡く統廢合されてしまつた。幸に本誌が過去の法動と將來の大任務遂行によつて存續を許されたことは、偏へに本多上人の御偉德に因る。たとへ僅少の頁數とはいへ、かゝる時り本化別願の大法を昂揚し、毅然先師の學風を護持して、立正安國、皆舞妙法の淨願に勇精しつゝある。宜しく御清捧を希ふ。

○日足が短かくなつて、而も用務が段々繁雜する。それを默び勇んで寢食を忘れ和かに遂行出來るのは、畢竟信心のお蔭であるまいか。忙しければ忙しい程、僅かの時間でも都合つけて信仰三昧に入られれば、よい考へは出ないであらう。有開階級のものが進び半分に寺院や神社に參詣しても、それは無功德といふべきである。いかに多忙の身でも、これが大切であり、第一義だと解すれば、時間や距離は問題でない。いつも入日又月曜朝の天氣晴朗たる人々に深く敬服する。

統一定價
一部特金二十錢 送料二錢
半ケ年 金一圓二十錢
一ケ年 金二圓二十錢 送料共

昭和十九年十一月二十七日 印刷納本
昭和十九年十二月一日 發行

東京都小石川區音羽町六ノ十七
編輯發行人 磯部滿事
東京都西谷區内藤町一
印刷人 山田英二
東京都小石川區音羽町八ノ十一
印刷所 新興印刷音羽工場
東京五九六
東京都神田區淡路町二丁目九番地
配給元 日本出版配給統制株式會社
東京都小石川區音羽町六ノ十七
發行所 財團法人 統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番
會員番號二二五二一二號

昭和三十年十二月二十七日 第三種郵便物認可
昭和十九年十二月二十七日 第三種郵便物認可
昭和十九年十一月一日 印刷納本
昭和十九年十一月一日 發行

第五百九十九號

統一

第五十年二月 血戰版

大法鼓

佛、阿難に告げたまはく、汝今亦諸に大法鼓を擊つべし、我れ今當に大法鼓(本體に入りて有我を說き、一佛乘の圓鼓)を說くべし。(參集せる十方)諸の如來は、諸の菩薩の爲に是の如き說を作したまふ。衆(等)なる說、(未曾なる)難行、難迦牢尼世尊は五濁(惡世)の國土(娑婆)に於て世に出興し苦惱の衆生の爲に種々の方便もて大法鼓經を說きたまふと。

佛、迦葉(釋尊十大弟子の一人)に告げ給はく、今この會の衆は、復一切淸淨純一なりと雖も、然も醍醐の說(方便說)に於て著解せざるものあり。

迦葉、佛に白して言さく、云何なるを名けて醍醐の說と爲すや。

佛、迦葉に告げたまはく、醍醐の說とは謂く、如來の畢竟涅槃を言ふなり。而も實には如來常住不滅なり。般涅槃とは毀壞の法にあらず、この修多羅(經典)は難復淸淨なり、明顯の言辭百千の因緣もて分別開示す。是の故に迦葉よ、當に此に此の諸の大衆を觀察すべし。下劣の衆生及び聲聞初業の菩薩、是の念言を作さく、我れ聽受するに堪任せず、如來已に涅槃したまふも、而も復說いて常住不滅なりと言まふ、大衆の中に於て未だ聞かざる所を聞くと、座より而も去る。所以は何ん、彼の人、長夜に般涅槃に於て空見を修習し、難醍醐の淸淨經を聞くが故に、座より而も去る。法身の常住不變を信解する者は、雖も乃ち安住して一切の如來藏經(如來藏とは佛性なれば、佛性より起みて如來の常住を說く教)を受持し、亦能く解說して世間を安慰し、一切聲聞の說を解知し、善く一切の了義不了義(佛の常住を說かず、佛性を說かず、有我を說かざる空見は不了義の說)を觀ぜん。

—大法鼓經—

釋尊の大般涅槃

本多日生

法華經を信仰して居る人の中に、釋迦如來の名號功德といふやうなことを考へてゐないやうであるが、それは大きな間違ひである。如來神力品には十方よりして、南無釋迦牟尼佛と唱へたといふことがある。分別功德品に於ては、佛の名十方に滿えて廣く衆生を饒益すといつて、釋迦牟尼の御名が娑婆世界を救ふのみならず、釋迦牟尼の御名に依つて十方の衆生が濟はれて居ると說かれてある。法華經は釋尊の名號の有難いといふことを力說するものである。釋尊の御名に依つて佛法を信解しなければならぬ。名號といふものは、定まらない前ならば、それはどうにでも融通の利くものである。たとへば父の名前が定まつてゐなければ、それは後から田吾作と附けようが利兵衛と附けようが、構はないけれども、子として生れる時分に親の名前が定まつて居ないといふことはないのであるから、どうしても其の子は利兵衛の子、田吾作の子といふやうになる。同樣に佛法を說かれし釋迦牟尼既にあつて、吾々は之を奉じて佛法を信ずるのであるから、後の者が其の名前に就て變動せしめるといふことは出來ない。名號は非常に大事なことで、日蓮聖人は『名は體を現はす』と申されて居る。

釋尊が有難い敎を立てられて今日まで傳はつて來て居る以上はその釋迦牟尼の御名を動かすといふことは出來ないのである。殊に法華經は、釋尊の御名を非常に尊重するのであつて、所謂大義名分と申して、先づ名を正さんかなと孔子も言つた。老莊の學は名前などはどうでもよい、『名の名とすべきは常名にあらず、大道廢れて而して後に仁義有り』など言つて、仁義の道德などいふものは、道が廢れて後に起つたものである。名前などは無い方がよいのだといふ。その老莊の淺義が禪宗や其他の佛法の中に侵入して居るが、佛敎は老莊の學の方に近いものか、孔孟の學に近いものかといふことが大事な點である。法華經の思想は孔孟の思想の規律嚴然たる大義名分論の思想である。大體儒者達の佛敎研究者などは、禪學だけを見て佛敎の全體と思ひ込んで、それで皆惡口を言つたものである。又近代の人は頗りに人智に誇り、それに自惚れたが爲に、自分の徹し得ない所のものに超越の態度を執つたのは大失態であつた。科學の知識を以ては判斷し得ない崇高な問題に對して、未だ決定すべからざる事に斷案を下さんとするその慢心が現代を禍して來たのである。少しは夫等の爲に文化が開け、學問が進んだやうであるが、それに就て失ふ所と、得たる所とを比較すると、寧ろ失つた所の方が大きいのである。今日のやうな目前の物質慾に囚はれた生活狀態になつたのは、確かに人心の頹廢である。多くの思想はそれを辯護して居るが、それは辯護士が泥棒の辯護をするやうなもので、如何に辯護しても要するに泥棒の辯護である。それは親やうであつて、偽して親れば人は食なくしては生きて居れぬといふ事は、眞理のやうであるけれ共、併し場合に依れば生命をも犧牲にして尊さなければならぬと云ふのが、道德宗敎又は高遠なる文化の根本である。生きることを第一に置いて、生きるが爲には食物が無ければならぬと云ふので、

するのは、向上したものでなく、墮落したのである。さういふ唯物的の思想が惡いと云ふが、さうなるのは畢竟宗敎の根柢が淺いと謂はなければならぬ。故藩したのは息子であるけれ共、親父がシツカリして居ないから、言つて聞かしても一向聞かないで息子が故藩するのである。結局親に權威がないからである。宗敎にシツカリした根據が無いから、僅な人智に誇つた西洋の文明も失敗だが、僅かなことに權威を失つた基督敎も誇ることは出來ない。若しかゝる事に反對する議論があるならば、來つて一佛乘の經典を研究するがよい。この正しき敎義に依つて啓發されて居つたならば、いくら西洋の惡思想が來ても振動だもすることはないのである。

そこで二月は、釋尊の御涅槃を現ぜられた記念すべき月であるから、一寸かこの大般涅槃といふことに就てお話を致しておきたい。

涅槃とは恭く常住の意義である。一時の現れである肉體は入滅するけれ共、その佛身の本體は不滅のものであるといふ事を現すが故に般涅槃と稱する。若しその僅消えて無くなるものであれば涅槃と云はずに死亡とか死去とか云はんならぬ。それを云はずに涅槃と云ふのは、是は一時肉眼では肉體は滅するやうに見えるが、その本體は常住であるといふので、佛陀は涅槃するといふのである。即ち壽量品に『方便を以て涅槃を現ず』と說かれて居る。佛身は常住實在である、佛世尊は消えてしまふものではない、肉身の教化は了つたから、不滅の本體に還つたのであると說かれて居お弟子の迦葉尊者が、何が故に佛の般涅槃が常住であつて、畢竟滅の空に歸さないのでありますか。即ち無くなつてしまはないのでありますかとお尋ねした時に、釋尊が答へられるには、譬へて見ればこゝに家があるとせよ、其の家が無くなるのは有爲法であつて、即ち人爲的にこの現象世界に現れた物を寄せ集めて拵へてあるから、火を放れば燒える、大風が吹けば壞れる。それで家が無くなつたと云ふのであるけれ共、有爲法の上に於ては一時有つたものが無くなつたやうに見えるのは是は眞實である。即ち有爲の世界は無常である。併し實相の世界は常住でなければならぬ。汝が佛を有爲法として一時現れたものゝ如くに見るならば、諸佛の涅槃は畢竟滅に歸するであらうけれ共、佛身は無爲であるが故に、諸佛の涅槃は積極的であり、束縛より解脫したのである。『諸佛の涅槃は即ち解脫なり』とあつて、無常を解脫して常住に歸するのである。丁度鳥が卵を破つて生れ、人が牢獄から出たやうなもので、自在の大活動を得る解脫、それが涅槃である。禪宗では本來無物だとか、空だとか無だとか能くいふが、アレハ佛身に就ての問題ではない。人々が餘りに唯物思想に囚はれて、酒を飲めばうまいと思つて居るが、それも僅かの關係で酢になつてしまふものであるから、さういふ執著を除くことを說いたので、佛身の實在論の上に於てアアいふ思想を持つて來ると大變に間違ふ譯である。

それから涅槃が、釋尊に申上げるには、世の中を見ると人々は福樂を得たいと思つて居るけれ共、それは皮相的の樂みであつて

本當の涅槃を受けて居ない。それは何故かといへば、第一に自分の身が一日々々年を取つて死んで行く。いくら音樂を聽いたり、美味いものを喰べて居つても忽ち其の歡悅が破壞されてしまふ。これは私共の見るに忍びない事でありますから、本當の樂、永久の歡悅、それは涅槃の樂であります。どうか澤山の人に其の涅槃の樂を與へたいと思ひますと言つた。釋尊はそれを非常に喜ばれて、それはお前の言ふ通りである。本當の樂みといふものは、第一に妙色眞然といふことにならなければならぬと言はれた。色といふのは身を言ふのであるが、人間の身などは粗末なもので、或は病にも罹り、災害にも遇つて死にもし、腐りもするが、永久に人格を有ちながら滅びざる不滅の佛身を成就する。それを妙色と言ふのである。妙色とは現代語にすれば、人格實在である。人間のやうな意味合の相を有つて居つて、而もそれが滅びないのである。かういふ人間の肉體とは違ふけれ共、身もあり、心もあり、美しい相を有つて而して夫れが滅びないのが妙色眞然といふことである。その妙色眞然といふものに現はれて、その上に眞の幸福を產出さなければならぬ。だから本當に人を救ふといふことは、滅びない身を與へてやらなければならない。然るに涅槃して消えてしまふといふことになれば、本當の歡喜には達することが出來ない。生きて居ればいろ〳〵苦勞がある。自分の思ふ事も協はないし、一方からはいろ〳〵な責任を負はされる、或は借金に責められ、さうして樂みは無い。いつそ死んでしまへば欲しいと思ふ考も無くなり、責められる苦みも無くなるから、一息に死んで消えてしまへば苦勞が無くなるだらうといふので、三昧の道に飛込んだりする思想がある。さういふ思想を以て佛教とするならば、佛教こそ自殺を奬勵するところの教となる譯である。死んでしまへば何も苦勞はない、死ぬのが一番詰ちやと思ふけれ共、佛教ではさうはいかぬ。人間の身を殺しても靈魂は續いて行く。惡い方で言へば、業の力は生れ變つて畜生に生れ、餓鬼に生れて更に人間よりも苦みを受ける譯である。善き方の力は段々向上して妙色眞然として佛の境界にも達し得るのである。だから唯だ死ぬといふことが苦みを除かれる所以ではない。死んだが爲に、人間であればまだ〳〵樂であつたのが、今度は牛や馬にでも生れて一層苦またなければならぬかも知れぬ。唯だ死が汝をして苦みを解脫せしめるものではない。善を行ひ、德を積み、其處に眞の解脫、幸福が得られるものであるといふことを佛は說くのである。であるから眞の樂みといふことに就いては、妙色眞然といふことが能く考へられなければならぬと說かれた。

これに對して迦葉が疑を立てゝ、普通の色といふものは無常である。『色は匂へど散りぬるを』といふいろは歌はそこから出て居る。色といふものは櫻の花ばかりを言ふのではない、人間の身を言ふので、人間の身といふものは一時若々しく榮えて居るのは恰度花の咲いたやうなものである。ところがそれが何時迄も續くものではない。『色は匂へど散りぬるを』で、いつの間にか顏に皺が寄つてさうして死んでしまふといふことを、『我が世誰ぞ常ならむ』と歌つたものである。人間の身は大體さういふ風は無常のものであるのに、今佛が妙色眞然といはれるのはどういふことでありますかと尋ねた。それに對して佛が言はれるには、そこが

佛は多くの場合に因緣譬喻を加へて義理を明らかにせられるのであるが、若しも深い佛教の義理をイキナリ了解し得るだけの智慧があるならば、因緣を須ゆる必要はないが、どうも譯の解らぬ者が多いから因緣譬喻を以て、更に說き聽かせるのである。

新說に仰しやつた時に迦葉が申上げるには、その因緣といふのは大體どういふことでありますかと尋ねた。佛が言はれるには、譬へて見れば因緣といふのは、父母があつて而して子供が生れるやうなものである。母は因であり、父は緣である。母のみでは子は生れない、父のみでも子は生れない。父の緣と母の因と合して其處に子が生れる。これを因緣生の法と名けるのである。世間の事は一切さういふ關係に依つて因と緣と合して其處に一つの結果といふものを生じて來るのであると言はれて、それからいろ〳〵此の世間の成立つ事、人間が斯ういふ有樣に生れて居るといふやうな事柄を、因緣の法則に依つて說明をされた。而して更に言はれるには、一番大事なことは前にいふ佛の大覺は皆有色である。有色といふのは色體がある。色は色質といつて此の身のことをいふから、色心と言へば身と心といふ意味になる。佛教では色といふ字を用ゐて身を指すのであるから、有色といへば身があるといふことである。佛と申せば雲か霧のやうなものでなく、チヤンと人格の有るものだといふことを說くのである。今日の佛教諸宗が眞實を有難い佛陀の人格實在として說き得て居ないといふことは淋に失態である。

今法華は哲學的の思想の上に於て、此の人格實在を說明して行

くのであつて、總て佛の常住といふことは、有色解説でなければならぬと説かれた。斯樣に釋尊が人格の實在といふことに力を入れられて居ることを吾々は注意しなければならぬ。日蓮聖人の御文章では、色身常住の義といふことを、十法界抄に仰せられて居る。色身常住即ち人格の常住を説かなければ、本當の佛法ではない。吾々が佛に成るといふこともさういふ意味である。

此の事を説かれた時に、涅槃が申上げるには、身が有るとしたならば、矢張り苦又は樂といふものを受けるのでありますかと尋ねた。釋尊が仰しやるには、それは病人が藥を服んで病が盡つたといふやうなもので、身は有つても病が盡れば病苦といふものが去るやうに、佛は一切煩惱苦惱を解脱して居るものであるから、身は有るけれ共、幸福は感じても苦は一切受けないものであるといふことをお説きになつた。病の爲に苦んで居た者が、藥を服んで病が盡つてしまへば、身はあつても病の苦は受けないのは自明の理である。佛陀は人格實在と雖も、凡夫の肉身に受けるやうな苦の病は切つて棄て、健康體に居るものである。これは大事なことであつて、自分が佛に成つて行くといふ意味に關して、斯ういふ所を十分了解すべきである。

そこで涅槃といふ言葉は廣く使はれて居るものであるから、或はこれを誤解して消えて行くやうな意味に考へた者もあるだらうが、それは涅槃に關する一面の誤解である。眞の涅槃は常住安樂であつて、決して消えて無くなるやうなものではない。非常な立派な意味に於ての存在を意味するものである。美盡し善盡せるものであつて、何もかも揃つて完備して實在して居るといふ意味でそれが所謂大般涅槃である。一般に涅槃といふ言葉は廣く使はれるが故に、さういふ涅槃に關する思想も或る部分には引つかゝつて居る。夫れ故にたゞ單に涅槃と言つたならば、消滅する意味にも取られるか知らぬが、大般涅槃、所謂眞の涅槃といふ意味を加へたならば、それは何時でも常住安樂にして、空とか無我といふやうな事はない。普通迷へる人々は、我我所と申して、自分の肉體及び自分に附隨して居る所のもの、即ち自分の家であるとか、自分の財產であるとか、自分の子であるとかいふ風に、この肉體との關係の爲に我我所の執といふものが非常に強い。それが爲に苦勞もし、罪も造り、いろ〳〵世の中の紛糾錯雜が起るのであるから、その我我所の執著を破らんが爲に無我の義を説かれるのである。だから世間の凡情の迷を覺めさす手段としては、無我の說は大事な教なのである。併し佛教に入つて信念增進すれば、遂に常住安樂有色解説に達しなければならない。詰局空とか無我は佛教の入口に於て世間の執著を破せんが爲に説くものであつて、信仰の進み行つた佛法の辯論は、常住安樂の有色解説である。

さうして佛陀は一切の覺を得られて眞の涅槃に達せられたのであるが、その佛陀が若しもある時が來て消えて無くなるといふやうなことであつたならば、世間の者はそれよりも先に皆消滅してしまふ譯である。であるから一切の存在といふことの中の一番大切なものを以て佛陀としなければならぬ。さうすれば佛陀の存在は永久に滅せざるもので、常住安樂である。常住安樂といふことが言へは我は有るのである。我無くしてどうして常住安樂といふことが言へ

るか。だから「實には有我にして無我にあらず」といつて、眞の佛教は有我だと説かれるのである。たゞ世間の凡情を救はんが爲に一時無我を説くが、それは所謂方便である。方便と言つても一般世間で考へる嘘ではない。自分を見るに小我、大我といふ二つが並に見られるのであるから、小さく考へて居る我と、大我といふ本當の我との二つが自分にあるのである。此の大我は永遠に續いて行くところの眞の我である。これを忘れて消えて行く小我の一方にひつ縋つて居るから、此の場合に於てはこれを無我であると説くのである。大我の方に於て有我を説くのであるから、無我といふことゝ有色といふことは少しも衝突しない。凡我俗我に對して無我を説き、大我眞我に對して有我を説く。信仰增進すれば涅槃の教は、常住安樂だといふことが理解出來る。

要するに佛陀の常住といふことを確信するには、たゞ信ずるといふだけでは矢張り本當に信ぜられない。信は善根の心を加へて始めて佛陀の常住實在といふことも能く解る。これは非常に大事な點で、佛陀の實在といふことは、唯だ心に信ずれば宜いやうなものだが、善い事を少しもしないで唯た信心だけ强盛にといふのでは、眞の佛陀を認めることは出來ないのである。何故かと言へば、世間の事に於て多くの人に經驗があると思ふ。たとへば習字の稽古をするのでも、手本などは書かなくても、熱心さへあれば一生懸命に上手になるやうにと考へて居れば宜いと言つて、たゞ熱心に上手になりたい、上手になりたいと思つて居るよりも、實際に手本に就て稽古をしながら熱心を鼓舞すれば、益々その熱心が鮮かになつて行く。同樣に佛陀の實在を信ずるといふに就ては矢張り自分が佛陀の慈悲に感受して、その爲には慈悲の心が已にうつるのであるから、親が有難いと思へば、その有難い心持が自分を優くして、優しい人間に仕上げて行くが如くに、どうしても善を行ふといふことを伴つた信仰でなければ、眞の如來の常住安樂を認める力が弱いといふことが説かれて居る。この意味は海に大事だと思ふ。無論信心が一番肝要であるが、たゞ空虛に信心々々と言つて居るのは、永い間孝行が大事だ〳〵と思ふばかりで、三年經つても肩を一べんも叩かないといふことになると、心は大事だけれ共、あまり心ばかりで何にもしないと、終には心も消えて行くのである。それは親が大事だといふ精神が一番肝要であるが、出來得ることは事實に親孝行のはたらきをして、肩を叩きながら親が大事だと思へば、その有難いといふ精神が一層强くなる。これは餘程能くお互が考へて置かなければならぬ事だと思ふ。今回はこれで終ることにする。

大祈願會嚴修

二月十一日（紀元節、開館記念日）午前十時

本部於御寶前

右之通り可相營候間當日御參加相成度候

財團法人 統一團

體曲れば影斜なり

磯部滿事

警局が重大化すればする程、一般の人心は殺氣立つて來る。これは警報の發令された時の電車の乘客態度を見ても、肯づけることであらう。それでヨリ以上の非常時を想到すると、コンナことでよいのか、どうぞモット餘裕があつて欲しい氣持ちがする。又各方面に於て物資不足のためであらう、盜難が續出する。是等は畢竟平素の精神教化が與へられてない結果、無意識に惡業を發揮して罪惡を醸すことになるので、吾々の慎重戒心すべき事である。

いふ迄もなく人生は今日限りのものでなく、昨日もあれば明日もある。即ち過去現在將來の三世は一貫せるものだから、此の一日惡用すれば、因果の理法に基いて必ずそれの幾十百倍の惡果を受けねばならない。同樣に善根を植えるならば、求めざるに寶珠は自ら到るといふことになる。だから古來から聖賢の教がよく行はれた時代は、人々は敬び五穀も豊穣であつた。

聖德太子が、政治の本は孝悌にあり、學問の本は神儒佛の三教にありと仰せられたことは、極めて深い內容のお言葉である。總じて物事は根本から是正されねばならない。孔子が弟子達に、

弟子入りては則ち孝、出でゝは則ち弟、謹みて信、汎く衆を愛して仁に親づき、行ひて餘力あれば則ち以て文を學ぶ。

と戒められた。この通り同じく學問をするのだといつても、その本末輕重を謬らないやうにせねばならぬ。即ち自分の家に在つては、先づすべてを捧げて父母に仕へ、その大恩の千萬分の一に酬ゆべきであり、又一歩外に出れば、上長先輩の人を尊敬して輕舉盲動の行爲ないやうにし、さうして謹んで信義を守ることが大切である。更に世の人に對しては溫情を以て出來るだけ親切を盡し愛護するといふ事が、これが人間の本性であり、學問の根本となるべきものである。この根本が確立して然る後に他の文藝に關する事柄等々を學ぶといふことが順序なのである。譬へば野菜を作るにしても、先づその土地柄を能く辨へて、それから肥料を與へるなり、世話してやらねば、よい收穫は望めない。又家を建てるにも基礎工事が大切であるやうに、人の人らしくなるには、先づ自分の本性に歸めて、然る後に技術なり事業なりに努力すべきである。ところが最近迄は物質文明に魅せられて、自分自身を顧みることを忘れてしまつた。今でも本當の自分を知らず、家を忘れ國を忘れて居る人々がありはしないだらうか。憧つてこゝに至ると背に汚を覺ゆるのである。浮榮輕には、

心の師と作るを厭ひて、心を師とせざれ。

とある。自分の心は現實に執はれた煩惱心が常にのさばつて、直心を覆ひかくして居る。これを譬へはいろ〳〵の譬をもつて諭えられた。その一は翳眼の譬で、眼球に薄いものがかゝつて、物がハツキリ見えない、その眼にかゝつてゐる覆を治療すればハツキリ物が見えると同樣に、人は貴い本性を有ちつゝ翳眼病にかゝつて居る。又重雲の譬といつて、月は何時も輝いてゐるが雲がかゝる。それも非常に濃い重なつた雲が月を蔽うて居るから、少しも光が見えないやうに、人の佛性の月は本來輝いて居るが、煩惱の重雲がこれを蔽ひかくして其の光を見ることが出來ないのである。又穿井の譬といつて、井戸を掘りさへすれば水は出るのである。それは地下三尺で水の出る所もあり、五尺七尺一丈にして出る所もあるが、掘つて水のある處に達すれば必ず水は得られる。それと同じく、人の心には佛性の淨い水を有つてゐない人は無いのである。それが極く淺い二三尺掘つて直ぐ出る罪の淺い人もあり、一丈も掘らなければ出て來ないやうな人もあるが、併し掘りさへすればドンナ人の心の中にも佛性の淸き水は湛えられて居るものであるといふのである。そ！一つ瓶壺の譬といふのは、壺の光が輝いて居るのだが、それが瓶の中に入れてあつて中では光つて居ても、外からは眞暗闇である。この瓶を割さへすればその中にチヤンと壺は光つて居るのである。吾々の佛性の光は輝いて居るけれ共、瓶を以てその光を蔽うて居るやうなものである。と說かれて居るが、此の四つの譬はいつも忘れないやうにして反省努力することが大事である。

國をあげて人々は戰力增强へと突進し、言論より直接實行への今日、敎化の重任を負ふ者は速かに思想的正攻法を以て、內外に普く師子奮迅の力を發揮すべきである。いふ迄もなく、かゝる大戰が武力ばかりで最後の勝結を示すものでない。人々の一擧一動一切の生活は皆戰力に重大影況を及ぼす、所謂總力戰である。それにしても根本に遡れば、矢張り人々の心構が戰局を左右することになる。一本の鉛をかしめるにも、一箇の孔を穿けるにも、工員の誠意如何が大影況する。一俵の增收にも長家の心持による。或は交通方面であらうが、經濟方面であらうが、官民を問はず重要がこれを蔽ひかくして其の光を見ることが出來ないのである。又穿井の譬といつて、井戸を掘りさへすれば水は出るのである。それは地下三尺で水の出る所もあり、五尺七尺一丈にして出る所もあるが、掘つて水のある處に達すれば必ず水は得られる。それと同じく、人の心には佛性の淨い水を有つてゐない人は無いのである。それが極く淺い二三尺掘つて直ぐ出る罪の淺い人もあり、一丈も掘らなければ出て來ないやうな人もあるが、併し掘りさへすればドンナ人の心の中にも佛性の淸き水は湛えられて居るものであるといふのである。そ！一つ瓶壺の譬といふのは、壺の光が輝いて居るのだが、それが瓶の中に入れてあつて中では光つて居ても、外からは眞暗闇である。この瓶を割さへすればその中にチヤンと壺は光つて居るのである。吾々の佛性の光は輝いて居るけれ共、瓶を以てその光を蔽うて居るやうなものである。と說かれて居るが、此の四つの譬はいつも忘れないやうにして反省努力することが大事である。

國をあげて人々は戰力增强へと突進し、言論より直接實行への今日、敎化の重任を負ふ者は速かに思想的正攻法を以て、內外に普く師子奮迅の力を發揮すべきである。いふ迄もなく、かゝる大戰が武力ばかりで最後の勝結を示すものでない。人々の一擧一動一切の生活は皆戰力に重大影況を及ぼす、所謂總力戰である。それにしても根本に遡れば、矢張り人々の心構が戰局を左右することになる。一本の鉛をかしめるにも、一箇の孔を穿けるにも、工員の誠意如何が大影況する。一俵の增收にも長家の心持による。或は交通方面であらうが、經濟方面であらうが、官民を問はず責任上下悉くその行動は、その當時の心境の顯現である。心が本筋に覺めて居るか、本能慾に支配され居るかが根本の問題である。ある人は戰力と體力といふことを强調するが、それも主伴を種別したり顚倒しては、敵米英の餌を啄むことになる。日蓮聖人が、『身强き人も、心甲斐なければ多くの能無用なり』と申された。よく勵へねばならぬ點である。

日毎に武力戰の方面は重大化して、言論機關紙上にも『敵は殺到するこの決戰期に、決戰體制が未だ十分に發揮されてない。指導層は洵々たる國民大衆の純情に何の面目があるか』といふやうな血を吐く思ひの社說も見受けられるが、これなども畢竟するに彼等指導層の本心麻痺であり、不誠實の結果であるまいか。彼等の心境が驕慢、邪見に陥ちて、崇高な宗教信仰の實を捨てゝ居るから、折角前述の譬に示された立派な本性を發揮されないものと思ふ。從來家庭上にも惠まれ、又社會に於ても相當の地位權勢を握り、何不足なく生活出來るやうな人は、現實の世界に醉ふて、すぐに壞される皮相の歡樂に滿足して日常を過すために、本當の幸福も知らず浮き草の一生を送つて、最後に大きな悔恨を貽すのである。それがある新興層の中に、刻々に緊迫せる國家の前途にも慮りなく、今日一日一時を無眞に過さんとして藥漁いて居る傾向はあるまいか。或は災難逃れをしたのだから、この生命のある間に仕たい三昧の快樂を求めようとするやうな者はあるまいか。法華經には、『放逸にして五欲に著し、惡道の中に墮ちなん』とある。遊き慮りなければ近き憂ありといふことも事實であるから止惡作善を心がけて、何日何時急變に遇つても後悔のない準備が

特に大事である。貝原益軒が、

人は先づ誠の心を本として、善を好みてつねに勤め行ひ、惡を嫌ひてつとめ去るべし。

と謂へられて居るが、現在こそ各自反省して如何に悔ない毎日を敢闘するかが、大切の時ではあるまいか。最早益々寛容の妥協態度は一擲して、我が國精神文化の精髄を掲げて米英文明の偏調を知らしめ、物質界精神界に横はれる流弊を一掃して、大義侠の下に新秩序建設への基礎を確立すべきである。ところで斯ういふ偉大な力はチウ矢鱈に現はれるものではない、そこに宗教信仰の妙味がある。自分自身で如何に力んでみても本性の躍動は翔し難いので、どうしてもお經の因と、み佛の緣が加はつて始めて立派な菩薩行といふものが働くのである。これを經文には、功德不思議の力と示されて居る。どうか此際、志あらん人は先づ正しい宗教の信仰に歸して、泰然として國土の大難を打拂ふべく勇猛を奮ふ次第である。擱筆に臨んで、日蓮聖人文永十一年末の『顯立正意鈔』一節を奉したい。

日蓮去る正嘉元年八月二十三日、大地震を見て之を勘へ定めて書ける立正安國論に云く、藥師經の七難の內、五難忽ちに起つて二難猶殘れり。所謂他國侵逼難、自界叛逆難なり。大集經の三災の內、二災早く顯れ、一災未だ起らず、所謂兵亦の災なり。金光明經の內の種々の災請一一起ると雖も、他方の怨賊國內を侵掠する此の災未だ露れず、此の難未だ來らず。仁王經の七難の內、六難今盛にして一難未だ現ぜず。所謂四方より賊來つて國を侵すの難なり。加之國土亂れん時は、先づ鬼神亂れ、鬼神亂るゝが故に萬民亂るゝと。今此文に就て具さに事の情を案ずるに、百見早く亂れ萬民多く亡びぬ。先難是れ明かなり、後災何ぞ疑はん。若し殘る所の難、惡法の科に依つて並び起り競ひ來らば其の時何とせんや。……日蓮、富樓那の辯を得て、目連の通を現ずとも、勤ふる所當らずんば誰か之を信ぜん。去る文永五年に蒙古の牒狀渡來する所をば、我が朝に賢人あらば之を怪むべし。設ひ其を信ぜずとも、去る文永八年九月十二日御勘氣を蒙りしの時、吐く所の强言、次の年二月十一日に符合せしむ。情あらん者は之を信ずべし。何に況んや、今年既に後の國災兵の上、二箇國を奪ひ取る。設ひ木石たりと雖も、設ひ禽獸たりと雖も感ずべく驚くべきに、偏に只事に非らず、天變の國に入りて酔へるが如く狂へるが如く、歎くべし哀むべし、恐るべし厭ふべし。又立正安國論に云く、若し執心翻らずして亦面直蠶ほ存せば、早く有爲の獄を離して必ず無間の獄に墮せん等云々。今符合するを以て未來を案ずるに、日本國上下萬人阿鼻大城に墮せんこと大地を的とせん。此等は且らく之を置く。日蓮が弟子等又此の大難說き難きか、後の不審（善薩）無畏の義は、現身に信伏隨從の四字を加ふれども、猶ほ先師の强きに依つて先づ阿鼻大城に墮して千劫を經歷して大苦惱を受く。今日蓮が弟子等も亦是の如し。或は信じ或は伏し或は隨ひ或は從ふも但だ名のみ之を假りて心中に染みず、信心薄き者は設ひ千劫をば經ずとも、或は一無間或は二無間、乃至十百無間疾ひなからん者か。是を免れんと欲せば各藥王樂法の如く、臂を燒き、皮を剝ぎ、雪山國王等の如く身を投げ心を仕へよ。若し爲らずんば五體を地に投げ、御身に汗を流せ。若し爲らずんば珍寶を以て佛前に積め。若し爲らずんば奴婢と爲て持者につかへよ。若し爲らずんば等云々。四悉檀を以て時に當ふのみ。我が弟子の中にも信心薄淡者は、臨終の時阿鼻獄を現ぜん。其時我を恨むべからず等云々。

南無妙法蓮華經

疎開と佛教の精神

金城三郎

昨今の輝の混雜といつたら、ものすごい位である。足の踏み場もない程の人の海、荷物の山である。これは去る日の米機空襲による一部の被害を目前に見せられた市民が、今度は本氣になつて東京から疎開しやうといふ譯なのである。

此の前も、或る會合で聞いた話であるが、宗教も今迄は隨分と疎子扱ひにされて來たが、時局のお蔭で、段々とその眞價が、方々で認識され出して來たと。

何時の時代にも、時局が切迫すると、それに比例して、本當に力のあるもの、眞實なるものが要求されるのであるが、凡て事物といふものは、時機といふ事が大切な條件となつてゐる。法華經無量義經說法品の中に、

性欲不同なれば種々に法を說き、種々に法を說くこと方便力を以てす。四十餘年には未だ眞實を現さず

と仰せられて、釋尊でも法華經を說かれるまでに、四十年餘り、華嚴、阿含、方等、般若と緣覺相手の小乘經典を說かれた。「性欲不同なれば種々に法を說き」と仰せられた所以である。本物といふものは、中々一すやそつとで出るものではない。益々せつぱつまらなければ本當のものといふものは現はれない。その事を下方他方舊住菩薩事といふ御書の中で日蓮聖人も仰せられてゐる。

龍樹・天親・南岳・天台・傳敎・等大門を弘通せざる事、一には附屬せざるが故に、二には時の來らざるが故に、三には末法他方なるが故に、四には機未だ堪へざるが故に。

日蓮聖人は、天台、傳敎の兩大師を常にいたく讚仰せられたが龍樹、天親、南岳は別として、天台、傳敎のやうな大師でも、時機不相應の故に、法華經を正統には說けなかつたと仰せられてゐる。顯佛未來記に曰く、

天台大師云く、後の五百歲遠く妙道に沾はん云々。寶瓮流布の時を指すか。傳敎大師云く、正像稍過ぎ已りて末法太だ近きに有り等云々。末法の始を顯樂するの言なり。時代を以て論ずれば龍樹天親にも超過し天台傳敎にも勝るゝなり。

日蓮聖人の御文を見るに、如何に天台、傳敎兩大師が法華經の弘通すべき末法を懸はせられたか、目のあたり見えるのである。これと同じやうなことを、應治三年、富木入道御返事の御書にも認められてゐる。これ等は皆時機が到つてないための御歎きであつたと云はれるのである。

時局が段々切迫して來て、始めて宗教の眞價が判つたと云ふこ

となどは迂闊な話といはなければならないが、實は、是がいふ所の時機の問題である。

偉い人なら時機を早期に知るといふ事も出來るが、凡夫ではそれがなかなか分らない。ぎり〳〵のところまで來なければ目が覺めない。

日蓮聖人は、立正安國論を書かれた當時、他國侵逼といふて、外國から攻め寄せられるといふ事を遠慮に進言せられた。即ち立正安國論を作進せられた九年後、その進言が符合適中せられたる旨を、自ら卷末に記された一文に、

文應元年之を勘ふ。正嘉より之を始め文應元年勘へ奉んぬ。去ぬる正嘉元年八月廿三日、戌亥の尅の大地震を見て之を勘ふ。其後文應元年七月十六日を以て、宿谷禪門に付いて最明寺入道殿に獻じ奉る。其後文永元年七月五日大彗星の時、彌此の災の根源を知る。文應元年より文永五年後の正月十八日に至るまで九箇年を經て、西方大蒙古國より、我が朝を襲ふべきの由牒狀之を渡す。又同六年蒙れて牒狀を渡す。既に勘文之に叶ふ。之に準じて之を思ふに、未來亦然るべきか。

聖人といはれる人には、九年、十年後の事はまだしも未來も凡て判るのだから恐ろしいものである。日蓮聖人は、更にこの事を一昨日御書に於て、

夫れ未萌を知る者は六正の聖臣なり。

と仰せられた。賢人、聖人達には、手にとるやうに見える事柄が凡人にはなかなか見えない。しかも聖人になると、まだ現はれない未萌の事柄でさえも判る。凡人にはそれが云はれても分らない。

その事から考へると、一回二回三回の空襲位で、右往左往する都民の騒ぎは何うであらう。正に以上の御文章など實に懷かしく拜誦されるではないか。我々凡夫には、何うもぎり〳〵一杯のところまで來なければ物の實相が分らない。

疎開の事にしても、當局ではずつと以前から、鐘太鼓の鳴り物入りで騒いでゐた筈である。しかもその當時は、そんな事には耳も藉さず、實に冷淡に構へて居た連中が、今度はお藏に火のついたやうな騒ぎを演ずるのだから、世の中は不思議といへば不思議である。

丁度、それと同じやうなことが、壽量品の中に、良醫の譬として擧げられてゐる。曰く、

此の大良藥は、色香美味皆悉く具足せり。汝等服すべし。速かに苦惱を除いて復衆の患なけんと。

其の諸の子の中に心失はざる者は、此の良藥の色香俱に好きを見て即ち之を服するに、病悉く除こり愈へぬ。余の心を失へる者は其の父の來れるを見て、亦歡喜し問訊して病を治せんことを求むと雖も、然も其の藥を與ふるに而も肯て服せず。

即ち素直に疎開の事が受け取れた者は、この譬へのやうに、さつさと疎開をして終つたが、本心を失つた者は、疎開の重要さが判つてゐながら、而も疎開を肯んじなかつた連中である。

右の譬へでは、斯のやうな本心を失つた子供達に對し、父なる良醫は、良藥のみ殘して旅に出る。その後で、使を以て父が死んだと告げしめる。子供達は、父の死を聞いて、愕然として色を失ひ、苦くにして、父の殘した藥を飲み、始めて病が癒つたといふ事が、實に巧に說かれてゐる。

是の時に諸の子、父背喪せりと聞いて心大に憂惱して、是の念を作さく、若し父在しなば我等を慈愍して能く救護せられまし。今者我を捨て遠く他國に喪したまひぬ。自ら惟るに孤露にして復恃怙なし。常に悲感を懷いて心遂に醒悟し、乃ち此の藥の色香味美きを知つて、即ち取つて之を服するに毒の病皆瘉ゆ。

「自ら惟るに孤露にして復恃怙なし。常に悲感を懷いて心遂に醒悟し……」實に名文である。幾度讀み直しても飽くことがない。苦し、寂ういふ事は實は、常に我々の身邊にある事ではなからうか。自分の「我」のために、人の言ふ事がうけとれず、仲違ひをしたり、惨憺たる云事を演ずるといふのが多いやうである。後になつて考へると馬鹿々々しいと思ふ事でも、その時は氣が附かない。氣がつかないといふ事は病が癒さないともいへるであらう。空襲の被害を見て慌てた連中が即ちそれである。丁度父の死を知つた時の子供等の悲感のやうなもので、死に代る空襲といふ事實によつて疎開の良藥の味がやつと判つたのである。否、分る時が來たのである。

番局からいへば、斯のやうなものは、まさに世話の焼ける民衆であり、お經の「毒氣深入」の衆生であるが、佛道を修行するといふ事も恐らくはそんなものではなからうか。

今迄は、人々から疎まれてゐたが、時局の推移と共に段々に人々が宗教を理解して來た。早く知つて貰へばよい譯のものであるが、それが中々分らない。未萌を知る聖人から見たら滑稽い限りであらう。日蓮聖人は、立正安國論の冒頭に、

近年より近日に至るまで、天變地妖、飢饉疫病遍く天下に滿ち、廣く地上に盡る。牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招くの輩既に大半を過ぎ、之を悲まざる族敢て一人も無し。

といはれてゐるが、當時にあつて、此の慘狀の原因を知つてゐるものは、日蓮聖人を除いては一人も居なかつた。日蓮聖人にしてみれば、そのところが實に殘念であらせられたであらうと思ふ。それが後に所謂十一通御書となり、また一昨日御書となつた譯である。

日蓮聖人は持法華問答鈔といふ御文のなかで、

譬へば高き岸の下に人ありて登ることあたはざらんに、又岸の上に人ありて縄を下して、此縄にとりつかば我れ岸の上に引登さんと云はんに、引人の力を疑ひ、縄の弱からん事をあやぶみて、手を納て是をとらざらんが如し、爭か岸の上に登る事を得べき、若し其詞に隨ひて手をのべ是をとらへば即ち登る事を得べし。

凡夫の凡識程救ひ難いものはない。折角親切に疎開させてやらうといつてもやらないのが普通一般の民衆であつた。

また、これと同じやうに、尊い佛の敎へがあるに不拘、頑疾偏執、佛敎を信じ得ない人が多いといふことは、まことに痛ましい限りであり、それをお經では「諸獄の基」とまで強く言つてゐる。

洵に現在は、末法無戒、白法隱沒の時代といはれる所以ではあるが、有難いことには、その末法に至つて、法華經が流布されるといはれてあるから、我々はこの金言を護つて、大いに精進すべきである。

其位に素て行ふ

森　梧葉

情ら考へて見ると、何しろ今は大事な時であつて、この間戰地を歩いて來た人の話を聞いても、日本の國が擧つて以來初めての大きな戰である。日清戰爭はどの位で濟んだかと言へば、年限で言へば明治二十七八年の二年に亙つて居るが、その戰に費した經費は、マア當時は物價も安かつたし、戰も小規模だつたから二億圓で濟んだ。それから十年經つて明治三十七八年に日露戰爭をやつた時には、これは戰も前と違つて規模も大きかつた。又たつた十年であるが前よりは物價も騰つたので、日露戰爭は初めから參ひまでに大體二十一億を要した。日清戰爭の十倍以上である。今回の戰爭は、今年で濟むか濟まないかは豫言が出來ないが、驚くべき巨額に達して居る。それだから國民たるものは餘程シツカリしなければ、この戰だけを無事に濟ますことさへ出來ない。まして戰後の經營といふことになつたら大變な事である。その覺悟がなければ駄目である。よく世間には『日本には天佑がある』と言ふ人があるが、天佑といふのは、人間が人間の力を盡さないで天の助けなどがあるものではない。人事を盡して後に天の助けがある。こゝはシツカリと考へて、更に角人間の全力を盡さうといふ決心をしなければならない。又社會がだん〳〵と複雜になれば自分の事をするのでも隨分骨が折れる。日清戰爭の時に、兵隊一人が動くのに日に約そどの位の經費が要るだらうか。これは兵隊の小遣だけではない、鐵砲を使ふのでも、軍艦を動かすのでも、何でもスツカリ入れて計算して、日清戰爭は御存じの方もあらうが、兵隊一人に付き日に二圓八十錢といふことだつた。今回の戰爭は、爆彈も飛ばさなければならず、飛行機も動かさなければならず、戰車も動かさなければならず、萬事が大掛りであつて、これを計算して見ると、兵隊一人に付き日に二十圓くらゐを要して居る。だから百萬人動かせば日に二千萬圓要ることになる。尤もマア當局の方では兼て心掛けて、いろ〳〵物を買つてお置きになつたから、それ程要つて居ないかも知れぬけれども、この品物を金に換算すれば、今度の戰は兵隊一人に付き一日二十圓を要して居る。だから今度の戰は、この經費だけで言つても容易なものではない。日本の國が開けて以來初めての大きい出來事であらうと思ふ。斯ういふ時に、國民たるものがウツカリして居てたるものではない。自分勝りのことを計つて居てたるものではない。

どうも我國では今までお樂だつたから、樂觀し過ぎる嫌がある。戰をするのでも、兵隊を出して、その兵隊の全部が第一線に立つて闘ふものではない。途中で怪我をする者もあれば病氣で歸る者もある。それは大變なものである。日露戰爭の時の記錄を見ると三十七八年の間に戰に行つた人の延人員は百十萬に達して居る。一度にそんなに出たのではない、後から後から出たのであるが、全部では百十萬に達した。その百十萬も兵隊を戰地に送つて置いて、一番參ひに率天の大會戰に於て、日本の陸軍の全力と露西亞の全軍とが衝突をしたのだが、この最後の大會戰に於て、百十萬出した軍隊のどれだけが役に立つたかといへば、僅に二十六萬である。日分の一で、あとは途中で死んだり沙河の戰鬪で死んだり怪我をしたり病氣で送り還へされたりして居る。斯ういふやうなもので、戰といふものは決して出た者が皆直ぐに戰場の第一線に立つものではない。途中にいろ〳〵な障りがある。その中を越えて行かなければならない。これは容易なことではない。今度の大戰にはどれだけの軍隊が參加して居るか、當局の方では秘密にしていらつしやるから判らないが、恐らくは出た人の四分の一に足らぬ人か、或はヒヨツトしたら五分の一ではあるまいか。怪我をした人もあり死んだ人もあり、又占領したところは皆軍隊を留めて護ちなければならぬ。そんなに派手にパツと效果を擧げるナンといふことの出來るものではない。それだけ骨が折れる。又戰爭が濟んだ後の骨の折れることは容易なものではない。

斯ういふやうなことを考へて見ると、私共はウツカリして居られない。ウツカリして居られないといふことは、要するに國民が今までの行き掛りを捨てて、本當に眞面目になつて、自分に與へられた事に全力を打ち込まなければならぬといふことになるのである。人間に與へられた仕事といふものはそれ〳〵違ふ。表に立つて派手な仕事をするのも大事であり、蔭に隱れて地味な仕事をするのも大事である。そこに一つの狂ひがあつたらば、全體といふものの健全な發達は出來るものではない。

永遠の成功を求めようとすれば、蔭に隱れた骨折を尊重するといふ氣分がなければ、本當に行くものではない。それにはどうしても信仰心がないといけない。永遠の事を考へて、人に見られても見られなくても、人に知られても知られなくても、自分の與へられた事に本當に力を打ち込むのだ、斯ういふ考を銘々が家の内で養はなければいかぬ。親父がさういふ心持になつて、細君もさういふ心持になつて、さうして自分の子供達は勿論、その家へ出入する者も自然さういふ氣分になるといふことに、皆が骨折つて呉れさへすれば、それで出來ることである。だから直接に世の中の役に立たなくても宜い。自分のする事に本當に力を打ち込んで行けば、何かの意味に於て世の中の役に立つて居る。何かの意味に於て國の土臺を作つて居るのだから、そこに滿足を感じ、悦びを感ずるといふやうになりたいものである。今の時代に於て殊にさういふことが痛切に感ぜられる譯である。

斯う考へて見て、マア自分のことを言へば、自分達は力もなにもないけれども、斯ういふ時代に於ては何とかして、お釋迦樣によつて說き殘され、日蓮上人によつて日本を中心に弘められたこの法華經の信仰といふものを、自分のものとしてシツカリ握まへてこれを以て一人でも二人でも三人でも同じ心持の人を造つて行くといふことが、この非常の時に於ける國家に貢獻する唯一つの途だ。自分には他の途はないといふことを考へて、力及ばずと雖も勵んで參りたいと思つて居る譯である。

しづかなる庭の小草の白露を
求めて宿る秋の夜の月

西行法師

一統

第五十年三月　記念號

知法思國

抑も人の世に在る誰か後世を思はざらん。佛の出世は專ら衆生を救はん爲なり。

愛に日蓮比丘と成りしより旁法門を開き已に諸佛の本意を覺り、早く出離(解脫)の大要を得たり。其の要は妙法蓮華經是なり。一(佛)乘の樂寶、三國の衆昌儀眼前に流る、誰か疑網を貽さん哉。而るに(世人)專ら正路に背きて偏に邪途を行ず。然る間聖人、國を捨て、善神讃を成し、七難並に起つて四海閉かならず。方今の世、悉く關東に歸し、人皆土風を貴ぶ。就中日蓮生を此の土に得て、豈に吾國を思はざらん哉。仍て立正安國論を造りて故最明寺入道殿(時頼)の御時、宮殿入道を以て見參に入れ畢んぬ。

而るに近年の間多日の程、大我浪を亂し異敵國を伺ふ。先年蒙へ申す所、近日符合せしむる者なり。……夫れ末葉を知る者は六正の聖臣なり、法華を弘むる者は諸佛の使者なり。而るに日蓮悉くも驚嶽鶴林(法華經涅槃經)の文を開いて鷲王鳥意(諸佛)の志を覺り、剩さへ將來を勘へたるに粗普合することを得たり。先哲に反ばずと雖も、定んで後人には爲なるべき者なり。

法を知り國を思ふの志、尤も貴せらるべきの處、邪法邪教の輩、論奏議言するの間、久しく大忠を懷いて而も未だ微理を達せず。剩へ不快の見參に罷入ること、偏に難治の次第を愁ふる者也。

伏して惟れば泰山に昇らずんば天の高きを知らず、深谷に入らずんば地の厚きを知らず。仍て御存知の爲に立正安國論一卷之を進覽す。謗へ載する所の文、九牛の一毛也。未だ微志を盡さざるのみ。……早く賢慮を回らして須らく異敵を退くべし。

主を安んじ國を安んずるを忠と爲し孝と爲す。是れ偏に身の爲に之を述べず、君の爲、佛の爲、神の爲、一切衆生の爲に言上せしむる所なり。

—日蓮—

本部國報

○墓紀二千六百五年の元朝、夜來の敵機に一段と緊張した感且會を營むことは、特にこの乙酉の歳に一種の感銘深いものがあつて御同慶至極に想ふ。

○一週間の立正奉行新顕會に於ても、屢々B29の來襲はあつたが、幸に堅い同志の間に結ばれた强い信仰の綱を以て、何等の支障もなく滿願結了を見たことは、本當に有難い御計ひと登々爲法國精進を期する次第である。

○前宜奏議正長八木沼丈夫氏が、舊臘十二日、北京で病逝されたが、生前同信の關係から、中山正男、田中道爾氏等有志一同志主となつて一月十二日午前十時、本部御寶前に壯嚴壮大な追悼會を施行し、下中予凡社長、貫井華北交通東京支社長、福岡宜長班代表等の追悼談あり、又法華後援部理事の挨拶あつて正午過に名殘を惜みつつ散會。

○一月十七日夕長、小澤監事の發起で常任幹部會を開催し、時局に對應すべき重要案件に就て、隔意ないお互の胸中を吐露して極めて效果を收め得たことを祝ぜん。時が時であり、各自日々に繁劇の爲、多數に集合することは困難い事であるが、併し又精神的にも緊合せてかゝる懇談の機會を重ねることを期待するものである。

○當夜時を隙はぬ敵機の來襲に、毎週の講集も實に容易でなくなつたが、又一面からすればこんな事は所謂常非常時で、今後はモット苛烈様相を來たすものと覺悟せねばならないから、現在程度では遺憾なことなく、敢奮に勤作するがよいと思ふ。場所に依つては隨分非常識にも見られることがあるけれ共、其の時たり又周圍の事情なり等に據つて臨機應變の處置が肝要である。

中庸に、「君子は易に居て以て命を俟つ、小人は險を行ひて以て幸を徼む」と云つてある。人は場すだけを場せば、その成否は佛天にお任かせして居ると平易であり。安樂である徒らに道理に逆行したり、疑いて德倖を求めたりするから苦む譯であらう。結局は『他事を捨てゝ南無妙法蓮華經』である。

○二月は十一日紀元節と共に本部開館記念日でもある。又十五日は大聖釋尊の大般涅槃會、十六日は日蓮聖人の御誕生日である。又二十八日は日什正師の御貫式である通り拘に意義深い月であるから、可然御奉公に勵みたいものである。

一統　定價
一部　半ケ年　一ケ年　送料共
金二十錢　金一圓二十錢　金二圓二十錢　送料二錢

昭和二十年一月二十七日　印刷納本
昭和二十年二月一日　發行

東京都小石川區音羽町六ノ十七
編輯兼發行人　磯部滿事
東京都四谷區內藤町一
印刷人　山田英二
東京都小石川區音羽町八ノ十一
印刷所　新興印刷音羽工場　東京五九六
東京都神田區淡路町二丁目九番地
配給元　日本出版配給統制株式會社
東京都小石川區音羽町六ノ十七
發行所　財團法人　一統園
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番
會員番號二二五二一二〇號